

# 機能主義の歴史的起源

— A・コントの知の三段階の法則，産業社会，企業者/作業者 —

竹内真澄

キーワード：知の三段階の法則，産業社会，企業者，作業者

## 問題の所在

機能主義functionalism／fonctionalismeという考え方は、特定のユニットを解明するとき、それを構成する内的要素をfunction／fonctionすなわち、そのものの働き、作用、効用、活動に即して把握する立場を意味する。こうした思考は、それじたい長い歴史の結果として登場したと言われる。

神話的、宗教的世界像から近代的世界像へ継起的に発展するにつれ、前者では、思考が目に見えない本質や実体に依存する程度が高く、後になるほどそうした検証不能なものを排除する傾向が強くなる。だからそれにつれて、外面に現れ、観察によって把握できるものに依拠して対象を掴もうとする発想がますます強まる。事柄の静的な本質または実体によってではなく、構成要素の働きに即して動的に捉える、一つの思考様式が登場し、強化されると言われる。これが機能主義の出現の歴史的経過とみてよい。

この結果、たとえば私たちは人やモノを評するとき、役に立つ／立たないといった尺度を使うことが多くなっている。これは日常生活が有用性utilityにしたがって構成される傾向にあることを示唆している<sup>1)</sup>。

機能主義一般の発生は、したがって、近代哲学、近代文学および近代自然科学のなかに求められる。グリム兄弟編ドイツ語辞典の「機能」の項を見ると、ゲーテやカントの使用例を挙げている。カント哲学の場合、世界を把握する主観が一定の範疇にしたがってものごとを捉える働きをもつことが注目されており、そこに理性の機能があるという表現がみられる<sup>2)</sup>。

しかし社会学のなかで機能主義が登場するには、それなりの固有の条件と目的が整う必要があった。結論から言えば、機能主義は産業資本主義期にこのシステムを正当化する目的でつくられたものである。この点を押さえていないと、きわめて多様な機能主義の変遷の中で、社会学における機能主義の中核的な意味を見失う恐れがある。

本稿は、社会学の誕生期に機能主義もまた誕生したことを強調する。そしてこの発生の端的なケースを学祖であるA・コント（1798～1857年）の著作中に求める。コントは、機能主義を構成した目的を、他の社会学者たちのように婉曲に述べたり、粉飾したりせず、真正面からあけすけに論じている。

しかし、コントが抱いていた機能主義構築の目的は、後の社会学者たちにとっては多少なりとも都合が悪いものであったように見える。それゆえ、社会学のそれ以降の歴史のなかで、コントの機能主義に内蔵せしめられたこの目的は、まさしくそれとして引き出されることなく、本殿の奥深い場所に安置され、めったに見えないように隠蔽されてしまった。

皮肉な言い方をすれば、機能主義の目的を社会学者たちが隠蔽した理由は、彼らが機能主義の恩恵にそれとなくあずかるためであった。そしてまた

---

1) G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Philipp Reclam jun. Stuttgart, 1987, S. 410. G・W・F・ヘーゲル、長谷川宏訳『精神現象学』作品社、1998年、395ページ。「役に立つものdas Nützlicheはそれ自体である物ではあるが、それ自体であることはたんなる一要素にすぎず、絶対に他のものに対して存在するのだからなければならない」。

2) Jacob Grimm und Wilhelm Grimm, *Deutsches Wörterbuch*, Leipzig:S. Hinzel, 1854, Funktion, S. 527.

そうであったからこそ、コントは社会学の祖でありえたとも言えるであろう。

## 1. 機能主義の定義

社会学上の機能主義についてひとまずおおまかな定義をあたえておかねばならない。新明正道はそれは「機能をもって全体としての社会のなかでその部分が全体の秩序を維持するために寄与する関連的な結果を意味するものと解する」<sup>3)</sup>のものであると要約した。

この定義は主として1960年代のアメリカの構造＝機能主義を念頭においたものである。しかし、コントを考察する場合にもこの定義は使えると言うべきである。新明は、その代表者であるパーソンズやマートンらアメリカ機能主義を批判的に考察することをめざしていたのだが、本稿にとって好都合なのは、この定義だけではない。彼は機能主義を大づかみするための時期区分をも与えてくれていた。多少加筆してみると、以下のような時期区分を作成することができるだろう。

第1期 19世紀：古典的社会学の有機体論のなかにおける機能主義の萌芽。

A・コント, H・スペンサー

第2期 19世紀末から1930年代：進化論と結合した「本源的機能主義」

G・ジンメル, E・デュルケーム

第3期 20世紀後半：社会学的機能主義 構造＝機能主義

T・パーソンズ, R・マートン

第4期 現在：機能＝構造主義／ネオ機能主義

N・ルーマン, J・アレクサンダー

以上のように機能主義の歴史を4つの段階に分けてみよう。そして、本稿では新明が述べている機能主義の「萌芽」と呼ぶところに問題を絞り込んで

3) 新明正道『社会学的機能主義』誠信書房、1967年、94ページ。

みよう。すでに述べたとおり新明自身は、第3期を対象としたので、古典的社会学における「萌芽」と位置づけたものをそれほど詳しく論じているわけではない。それでも彼は、それを「萌芽」とした以上、後続の「本源的機能主義」や「社会学的機能主義」、新明は触れていないが、機能＝構造主義またはネオ機能主義等へと継承されるものがまさしくここで「萌芽」として発生したこと示唆しているように思われる。この示唆をより詳細に解明することが課題となる。

19世紀の古典的社会学のなかにおけるこの「萌芽」とはいったいいかなるものであったのだろうか。私見では、この「萌芽」はたんなる兆しのような不定形のものではない。相当はっきりした論理的な骨格をもっている。そしてこの論理の裏にはコントのきわめて赤裸々な目的が裏打ちされている。この点を次項で考察してみよう。

## 2. 知の三段階の法則と有機体論

コントの出発点は、1822年の『社会再組織のためのプラン』である。ここで彼は、いわゆる「知の3段階の法則」を提起し、詳細な説明を加えた。コントは、周知のように、三段階の法則をもって自己の最大の発見と自賛し、晩年まで繰り返しそれを表明した。内容は、軍事社会→過渡期社会→産業社会にほぼ対応するかたちで神学的→形而上学的→実証的の3つの知の段階が推移することを定式化したものである。

知の三段階の法則は、通常歴史科学の基準から見れば、近代の二段階論をはじめて提起したものとみてよい。すなわちそれは、市民革命と産業革命という二段階の近代社会の構成がそれぞれ質的にまったく異なるものであることに着眼した考えかたなのである。

コントがこれら二つの時期を区分したのは、次のような理由からであった。形而上学的知に対応するのは過渡期社会であって、これは軍事社会の色彩がまだ払拭されてはいないが、産業社会の発展がとどめがたく出現してい

る、一種の入れ替わりの時期にほかならない。だから、この時期は神学的な知の要素が消えておらず、実証的な要素も相当に出現しているものとされる。形而上学的とは、この時期がルソーやカントに代表される理性の時代であったことをさすものである。

したがって、コントの視点からすると、近代の第一段階は本質的に不安定な二要素を抱え込んだままとなっており、これら二要素のうちコントから見てまことに危険だとみなされたのは、近代自然科学の思考様式である実証的知の部分ではなく、経験を超えてアプリオリに前提される自然法的な思考様式であった。実証的な思考が着実に伸張してきているのに、どうして、理性、人民主権、自由、平等、博愛、個の自律といった自然法的理想は疑われないのか。これらの理念はたんなる夢想でしかない、と考えるわけである。こうした問題設定からすれば、不純物たる自然法的思考様式を除去して、完全に安定した形で実証的知を安定せしめることが迎えるべき新状態となるはずだ、ということになる。

コントの知の段階論の最後の二段階をふたたび通常歴史科学的な知識で組み替えてみると、次のようになるであろう。近代の第一段階（コントの三段階の二段階目）は、ほぼ古典的市民社会の時期と言い換えることができる。コントは所有論を持たないので、そこを補足して考えてみると、古典的市民社会とは個別的私的所有の段階である。このうえに聳え立つのは、自営業者のイデオロギーであって、それが民衆全体をひっぱり格好になってフランス革命は起こったのである。人民主権、自由、平等、自律、自己決定などのイデオロギーは自営業に内在していたものの超越化、一般化であったと言えよう。

ところが、近代の第二段階にあたる産業革命以後の時期になると、個別的私的所有に対応する一切の旧理念は、産業資本主義の発展にとって手ごわい障害となってくる。何よりも資本主義的所有と取得の法則を完成する必要が到来すると、自営業者のイデオロギーは、自己労働にもとづく自己所

有に基盤を置くものであるから、搾取する者／される者、指図する者／される者という二極分解に直感的に抵抗するものへと急進化するわけである。しかし、資本はこういう抵抗を許すことはできない。自営業者は、上昇的に資本家に転化する者以外は、解体せしめて、膨大な労働者群へと転化すべき潜在的過剰人口の一部をなすにすぎない。

コントは早くから「人民主権」を「ドグマ」と呼び、「社会契約」というルソーの用語を「社会秩序」と書き換え、個人の自己決定を夢想と考えたが、その最も深い理由はまさしくここにあった。フランス革命を主導した小ブルジョア・イデオロギーを粉砕して、本来的な産業資本主義のイデオロギー的支配を確立することこそが重大な使命となったのである。

こうした歴史の深い脈絡から促されるようにして、1830年代のコントは「知の三段階の法則」を下敷きに、百科全書に代わる総合社会学の体系を対置する作業に着手していった。とりわけ社会学は、『実証哲学講義』（1839年）において「社会静学」と「社会動学」という二つの部分から構成され、整然とした学的構成をとるにいたる。「社会静学」というのは、所与の社会の内部要素間の関係をひとつの静止状態として関連付けるジャンル、また「社会動学」というのは、秩序全体が構造転換するプロセスを研究するジャンルである。一般に動学でどこからどこへ社会が動くかが確定すると、それぞれの秩序の理想的なあり方が確定できるようになる。

コントも同様の順序で研究をしたと思われるが、叙述は「静学」から始めている。それは常識的には、人々がある一定の社会の内部にいて、ちょうど新聞記事の各欄を眺めるように進行したほうがわかりやすいからではなからうか。ともあれ「社会静学」は、「知の三段階の法則」を記述する社会動学（社会変動論）と対照的に、その近代化過程の結果所与とされる社会の構造をスタティックに個人、家族、社会からなる3層の複合性として考察するものであった。

本稿で、機能主義の起源を主題化する以上、「社会静学」がその主たる考

察対象になってくるのは理由のないことではない。なぜなら、「社会静学」は社会の構成要素を一度時間的に静止させておいて、構成要素間の相互関係がいかなるものかを、その役立ち方、すなわち機能という視点から記述するものだからである。

そしてこの記述はコントの目的に従っている。機能主義を構築しようとするコントの目的設定はきわめて明快なものであった。コントは、近代社会の社会秩序がどういう形で成立しうるのかを「社会静学」において書き込んでいるのである。そして、機能主義の核心部分がまさしくここに集中的に現われる。なぜならば、「社会静学」のなかに社会秩序が析出されるのは、社会内部の構成要素が互いに有機的に支えあっているという特質によるものとされるからである。「社会静学」のなかからそのことを示すいくつかの箇所をあげてみよう。

コントは、個人、家族、社会の3つの層を考察するとき、一応個人から記述しているが、実は論理的には家族を先にして個人を後回しに考えていくべきことを論じている。というのも、個人はいきなり社会関係の外に自立的に存在することはありえないからである。コントのスミス批判は有名であるが、それによれば人間は生まれたときからいきなりホモ・エコノミクスの間像のごとく、単独者として社会を契約的に構成したりするわけではない。何人であろうといきなり独立自尊の士であるのではなく、家族の中に生まれ、成熟する長い過程をたどらねばならない。この限りで、コントが個人と家族の論理的な関係を家族のほうを優先して考察するのは理にかなったことなのである。

だが、正しいのはそこまでであって、コントは、何よりもフランスの一夫一婦制の近代家長制的家族を理想として家族社会学を考えていた。しかもここでのコントの着眼は、家長制的の核家族が男女間および世代間の「自然発生的な美しい上下関係」<sup>4)</sup>をつくる、という点にあった。

コントがどういう目的をもって家族社会学を論じたかも明快である。コン

トは、たんに家族社会学をつくりたいのではなかった。そうではなくて、コントが家族を採り上げたのは、家族の中に、女の男に対する、子どもの親に対する、自発的服従関係が存在するからなのであった。「下位の者について言えば、初めは必要に迫られて、次いで感謝の念から、少しも卑屈にならずに、大きな尊敬と完全な服従とを、これほど自然に上位の者に捧げられる社会（家族のこと・・・竹内）がほかにあるであろうか。また上位の者について言えば、義務と呼ぶには不適當なほど自然で優しい完全な献身と結びついた絶対的権威を持ちうる社会があるであろうか<sup>5)</sup>。このように、コントはほとんど感動せんばかりに家族内の権威と利他の関係に感銘しているのであって、だからこそこれを手本として社会学をつくる意義を認めているのである。

19世紀中盤にJ・S・ミルが普通選挙の問題をなげかけてコントの家父長制論と対決したことを別とすれば、20世紀のフェミニズム社会学が登場するまで、コントのこの目的設定が疑われたことはほとんどまれであったと言ってよい。それはともかく、この結果、個人はなによりもまず家族という一種の基礎的な有機体で生まれ、育つことが、独特のイデオロギー的な思い入れをもって登場することになったわけである。

一般にコントの社会学が有機体論を骨格に持っている点は、このように、鋭く家族社会学の考察に現れている。スミスだけでなく、ルソーやカントも含めて、およそ啓蒙思想が一般的に社会契約論的な市民社会論の立場になっていることをコントはあちこちで批判していた。コントにおける家族社会学の意義は、市民社会論の打破へと思考を導くことにあった。これは、コントの学問体系全体の思想史的な核心をなすものであって、有機体論と社会学の

---

4) *Œuvres D' Augste Comte, Tome IV. Au siège de la société positiviste.* Paris, 1893, p.461, コント, 霧生和夫訳「社会静学と社会動学——『実証哲学講義』第4巻より」『世界の名著』46, 中央公論新社, 1980年, 258ページ。

5) *ibid.*, p. 461-2, 同訳, 258ページ。

間の関係が内在的であることのひとつの証拠である。

コントの旧社会科学への批判は、経済学におけるホモ・エコノミクスが一個の抽象にすぎないという発言によく現れている。しかし、見失ってはならないのは、コントがスミスを批判した理由がなんらかの反ブルジョア的な思想を彼が持っていたためではないということである。スミス批判は、コントがブルジョア的な課題をより徹底するためにスミスの自然法的な思考様式を障害に感じていることを意味するだけである。

コントはスミスを褒めることもある。とはいえ、この賞賛は限定付のものであって、コントとしては社会科学を自然法思想から切りはなしたうえで旧社会科学のなかの使えるものだけを使うのがコントの立場なのである。いまの文脈では家族論のなかに個人論を包摂することが、家族社会学を生み、かつその打開の道となってくるのだ。家族と個人を、このような有機体論的イデオロギーで一体的に掴んだ上で、社会論を記述する段になって、コントは言う。

「人間社会が実際に個人から成っているというように考えることは、科学的精神の許さないところである。真の社会的要素となるものが、最小限その主要な基礎である一組の夫婦に還元された家族だけであることは確かである。・・・すなわち、本来、家族は、社会有機体の特徴をなす各種の本質的機構の必然的な真の萌芽である」<sup>6)</sup>と述べる。

「社会は、今まで個人および家族についてそれぞれ（考察を・・・竹内）行ってきたように、あらゆる時代、あらゆる場所に共通の基本構造を持つものとして検討され、個人によってではなく家族によって構成されたものとして考慮されるであろう。」<sup>7)</sup>

---

6) *ibid.*, p. 448, 同訳, 250 ページ。

7) *ibid.*, p. 469, 同訳, 262 ページ。

近代社会は、コントによって産業社会と呼ばれた。それは略奪＝掠奪を常態とする軍事社会から平和な生産活動を常態とする産業社会への移行の結果である。人間と人間の戦争状態から人間の自然に対する征服へと社会は移動する。コントによると産業社会内部には公的領域と私的領域があり、後者には企業、家族、個人など実に多元的な領域が含まれている。だから、引用文にあるように「家族によって構成される」というのは、たんに社会のなかに家族があるという意味ではなく、要点は、社会もまた家族に見られるように、有機体の原理によって、またはそれによって媒介されてこそ存立できるという基本構造をもつのだということなのである。

このような有機体論的な視点は、コントが1824年ごろ、中世の構造原理に強い関心を持ったことと関係している。コントはフランス革命に重大な意義を認識し、その不可逆性を承認していたが、同時に中世にも捨てられぬ魅力を感じて、カトリシズムの再評価にも積極的であったといわれる<sup>8)</sup>。しばしば彼がプロテスタンティズムには個人を絶対化する傾向があるのに対してカトリシズムには愛他精神があるというのは、このころからの考えであった。もともと1822年当時から有機体論的な発想をもっていたコントは以前にも増して社会論それじたいが一個の有機体として把握されねばならない、という確信を深めた。こうした視角をコントがもっていることを踏まえてコントの社会論を見なくてはならない<sup>9)</sup>。

---

8) Mary Pickering, *Auguste Comte, An Intellectual Biography*, Vol.1, Cambridge Univ. Press, p.261.

9) 清水幾太郎は、「社会学批判の課題」(1933年)で、コントの有機体論(オルガノロジー論)を鋭利に分析し、個人主義へのブルジョア側の批判と位置づけ、「社会学は進歩的な学問よりも元来反動的な学問として成立した」と特徴づけた。しかし、コントの批判はブルジョアの秩序一般へ向けられているのではなく、古典的市民社会(論)の秩序へと向けられていたにすぎない。だからコントはこの批判によって、より進化した産業資本主義の秩序につこうとしたのであって、反労働者的であるかもしれないが、反動的ではない。有機体論の意味も、清水が考えたよりは少し複雑である。コントは王政復古的な意味での反動ではないのは当然であるが、王政復古期の反革命論者たちとの付き合いから得た有

## 2. 社会有機体論の視点からみた階級論の構成

コントが「社会静学」で社会を論じた箇所を引こう。コントはあたかも旧社会学者、とりわけスミをはじめ多くの人々が扱った分業論とまったく斬新なかたちで取り組んでいる。コントなりの固有性とは何か。

「この基本的・自発的従属関係を正しく考察すれば、その主要法則がはっきりと見出せるように思われる。その法則とは、各種の個別作業が、自然に、一般性の大きさから見て、そのすぐ上に位する作業の指導を受ける、ということであると思う。これは、ある作業がまさに分化する瞬間に、どのような分化の仕方をするかを研究することによって、すぐに納得できる。」<sup>10)</sup>

コントは家族のなかに「美しき自然発生的な服従関係」を認めた。しかしそれがただ漠然と全体社会へ拡大することなどありえない。にもかかわらず

---

機体論的なモチーフをそのままうしろ向きに投影することなく、近代的に組みなおして、産業社会内部の階級関係を有機体論的な意味での機能的相互依存関係として掘んだわけである。清水は、「資本主義は本質上個人主義的なもの」(著作集1巻, 131ページ)であると述べているが、これは正確な規定とはいえない。資本主義は、表層としての商品論レベルでは確かに個人主義的であるが、深層としての資本レベルでは専制を内臓しており、労働者をして全体的労働者の一員として資本の指揮命令に従属せしめるからである。資本の生産過程の次元においては、資本の対労働者関係は個人主義的ではなく、たえず全体主義化され、この限りでまさに有機体論的である。コントが「秩序」と呼んで産業社会のなかに発見したのは、まさしく、この次元の人間関係のことであった。

コントはこの意味で新秩序を発見した理論的功績もっている。この貢献は、啓蒙思想家たちがまだ見いだせなかった資本主義の深層を発見し、ブルジョア的な立場から理論化した点にある。コントの社会学は、清水の考えているとおり、その起源において反市民社会論的である。しかし、清水はその反面で、コントが反市民社会的であることによって親資本主義的であるということを見落としている。学問が生誕の始まりにおいて時代に逆行することなどありえない。コントは長らく社会学思想史のなかで重要な意味をもつことができたわけもそこにある。清水は、初期の研究からして、コントの有機体論が反資本主義的であるかのように誤解してしまった。清水は、コントが達成したような意味において、産業社会の階級構成の中に有機体論が内蔵されていることを見落としたと言わねばならない。

10) *Œuvres D' Auguste Comte, Tome IV. Au siècle de la société positiviste*, Paris, 1893, p. 489, 同訳, 274 ページ。

家族における自発的服従関係と同等またはそれに準じるものが、果たして家族とは異なる編成の仕方では成立しているはずの産業社会に発見することが可能だろうか、というのがコントの深い関心であった。この関心を抱きながら、コントは分業の中に服従関係をとりだそうとする目的を持って産業社会の核心部へと分け入った。

コントが社会（産業社会）という場合、何よりもその内部での分業に焦点をあてている。コントの産業社会とは、農業社会の対概念ではない。産業社会は、略奪＝掠奪によって成立していた前近代社会にたいする対概念なのだ。したがって、リーディング・インダストリーが製造業からサービス産業（あるいは知的産業）へシフトするからといって、コントの産業社会概念が古くなるわけではない。むしろD・ベルの言う脱産業社会も、それが略奪＝掠奪経済ではない範囲の中での微修正である限りでは、やはりコントの言う産業社会であることに変わりはない。コントの言う産業社会はこうして、人間と人間との間の征服と闘争から、人間の自然に対する征服へとシフトした社会として立論されていた。そして産業社会の内部構成をコントは分業論において考察しようとしたのである。

しかしながら彼の分業論は社会科学史においてまことに異質なものとなった。なぜならばコントにとっての課題は、従来の分業論のなかで一度も立証されたことのない自発的服従関係の解明であったからである。

産業社会の分業を、彼は個別の工場をイメージしながら語っている。個別作業は、通常その上位に立つ一般的な作業の下に置かれる。「なぜなら、こうして分化した作業（個別作業のこと・・・竹内）は、その作業が出てきた元の機能fonction anterieureより常に必然的に個別的であり、以後、この作業の不断の完遂は元の機能に従属しなければならないからである。」<sup>11)</sup>

11) *ibid.*, p. 489, 同訳, 275 ページ。

コントのここでの発言の意味は次の通りである。つまり彼は、一般性の高い元機能から、分化によって、より個別的な新機能が出現してくると、解説する。すると、上位／下位とは元機能／新機能の関係に等しいことになる。こうして機能間の連関がそのまま、指揮する者とされる者の間の上下関係、コントの言う「基本的・自発的服従関係」をもたらすことになる、というのである。

少しパラフレーズしてみよう。たとえば小麦をつくっていた農家に余裕が生まれて、次世代で牧畜にも業務拡張を行う場合、穀物栽培に加えて牧畜業が派生する。穀物栽培を元機能として、牧畜業は新機能とされるこの農家の場合、穀物機能のほうが上位に立ち、牧畜業が下位に立つことになるだろう。もちろん、穀物が不振となれば、牧畜に支配的なモメントが移行することはある。だが、順序からすれば元機能が支配的機能を果たす上位に立ち、たとえば親が財政を取り仕切り、余剰をまわしてもらって息子が派生的な新機能を経営するにいたる。このように派生する新機能のほうが下位に立つことはごく自然である。企業の場合でも同じであろう。創業者が元機能を独占し、ここから派生する個別作業が他のメンバーに割り振られていくことで元機能が新機能を生む場合、元機能を握った側が上位に立ち、新機能は下位にたつことになるであろう。これは創業者が他人を雇用することにも応用できることである。

産業社会論の内実をなす社会的分業論の箇所ではコントはこうして、元機能が一般的であり、新機能が個別的な機能であると説明することで、上下関係を説明していった。これで一体彼は何を達成したのであろうか。この理論構築に並々ならぬ自信をもっていたことは自身の次のような記述に現れている。

「この法則（分業のなかから自発的服従関係が析出するという法則・・・竹内）は本巻全体の最も重要な結論の一つとなるはずで・・・現在、このようにしてこの分業という根本原理が獲得した新しい哲学的意義を、今ここで

指摘しておくくらいのことは許されるであろう。私は本講義の最初から、この原理を科学的階層関係hierarchieの基礎としてきた。』<sup>12)</sup>

この自負は、まさしく「社会静学」の決定的結論がコントの分業論にあることを打ち明けていないであろうか。この自負は、しかし、決しておおげさなものではない。というのも、産業社会における社会的分業に関する旧来の研究はコントとは基本的に異なっていたからだ。18世紀の社会的分業論の代表はなんとといってもA・スミスの『国富論』である。コントもスミスの業績をその点では賞賛している。

しかし、周知のようにスミスの分業論は商人間または作業者間の、いわば水平的な分業に考察の中心をすえていた。水平的な分業が「神の見えざる手」による媒介によってどのように均衡するかが、スミスの直面した理論的な主たる課題であった。もちろんスミスには地主、資本家、賃労働者という3階級論はあるが、これらは主として所得や社会的威信の上下に関するものでしかなく、水平的な分業とまったく同一の間接的なメカニズムにもとづいて所得と権威の差を説明するにとどまっている。そこには搾取する者／される者、指図する者／される者の間の直接（フェイス・ツー・フェイス）の垂直的なヒエラルキーがどのようにして生まれるかはまったく扱われていない。かえって、なにゆえに利己心を持つ主体の間に利己心を放棄するがごとき垂直の関係が生まれるのかは、謎のようにさえ見えるのである。強いてスミスの考えから、フェイス・ツー・フェイスの直接の階級的垂直関係を説明するとすれば、自己利益のためには上位者の指図に従うほうが得策だから階級関係を許容する、というような説明になるかと推測される。したがって、けっきょくそこにはせいぜいのところ打算的な関係しか出てこない。コントが望んでいる垂直的な階級関係論はこの意味でスミスの考察の外にあるものなのである。

12) *ibid.*, p. 489., 同訳, 275 ページ。

コントはこうした打算的な関係ではなく、より安定した、有機体論的な関係を想定している。旧来の分業論には満足できないのである。コントにとって課題になってきたのは、スミスの場合に見事に解明されたような、利己心をもつ個別的個人間の意図せざる連関として調整されていく経済メカニズムでは、もはやない。そうではなくて、19世紀産業資本主義に差し迫ってきていたものの解明である。つまり社会的分業を考察対象としながら、それが利己的個人による、不可視的な間接的メカニズムによる、結果的所得格差のようなものはコントにとってはどうでもよいことなのだ。もっとダイレクトな関係が説明されねばならない。個別の工場の中で、具体的に指図する者とされる者が、いかにして対立や闘争するリスクを避けて、一致協力してパートナーとなりうるのか、この解明が課題となっているのだとコントは産業革命下の状況を把握したのである。協働関係としての産業社会の理論の核心は、両者の間の自発的服従関係の成立にかかわる課題である。

だから、コントが「社会静学」において達成したのは、スミスらの古典的市民社会論を限定し、彼らがモデルとした抽象的個人の利己的行為連関とはまったく異質の、産業社会の社会的分業から内在的に出現するより直接的な、機能的依存関係の発見である。

これをコントは、市民社会論にたいする有機体論の側からの批判の視座から遂行していった。

コントの階級論には少なからぬ前進がある。まず、『社会再組織の科学的基礎』（1822年）の段階では、まだ大産業家、学者、人民といった素朴な階級把握をもとに大産業家のヘゲモニーを論じていた。だが、どうして大産業家が上位に立つのか、その正当性は論じられておらず、終生変わらないとはいえ彼の性急なイデオロギーが生じた形で先行していた。

次に、『実証哲学講義』（1839年）になると、コントは社会科学史のなかでとてもユニークなたちで分業論を固有に再編し、先に見たとおり一般／特殊、元機能／新機能の間の上下ヒエラルキーの析出の必然を導き出すこと

に成功する。

最後に『実証精神論』（1844年）では、以上の研鑽をふまえて、ついに企業者／作業者という範疇をクリアーに打ち出した。

こうしてコントは階級関係を異質な機能を担う人間集団間の自発的支配従属関係なのだと説明できるに至ったわけである。しかもこれは、家族のように血縁や共属のゆえに自然に生まれるとされる自発的服従とは質的に異なっている。近代の固有性を知っている彼は、家族原理をそのまま産業社会に持ち込んだりするような不手際は犯していない。近代的な他者間の上下編成として産業社会を構成しなければならないという前提を満たす。

かつての彼の中世への関心を、きちんと近代的に再編したうえでコントは産業社会の労使関係を有機体論的に組みかえてつかもうとしたのである。そしてこの努力の結果、個別企業内の労資関係は、見事に機能間の依存関係として、説明されるようになった。

コントは産業社会の自発的服従関係の発見意義を次のように断固として擁護する。

「この不可欠な従属関係subordinationは普通考えられているのとは違い、単に物質的なものだけではない。それはまた、特に知的、道徳的な関係でもある。というのは、この関係は、単に実践的服従を要求するばかりでなく、それまで普遍的であった機能を今独占する特殊器官の、能力なり誠実さなりに対する一定の信頼も必要とするからである。」<sup>13)</sup>

物質的なものでない、というのは、下位の機能者が上位の機能者に対して抱く知的道徳的な忠誠にかかわっているからである。これこそが、ミスのな抽象的な経済学的関係から区別される社会学固有の有機的な関係であることは言うをまたない。

---

13) *ibid.*, p. 488, 同訳, 274 ページ。

### 3. 社会学的階級論の理論構成

近代の階級は、啓蒙思想からすればやっかいなシロモノである。自由・平等・自立を旨とする自立的個人が織りなす社会に階級が存在することは、実は謎である。ところが、資本主義が発展するにつれて、この謎めいたものへの批判を招きかねない啓蒙思想はそれ自体が危険である。啓蒙思想で正当化しにくい階級は、しかし、産業革命の展開につれてますます露骨に現れる。それゆえ、旧支配思想としての啓蒙思想は新支配思想から見てますます邪魔になるほかはない。

コントが啓蒙思想家やそれとのつながりの濃厚なサン＝シモンと決別する理由は、まさにここにあった。啓蒙思想やその展開過程からは18世紀末にバブーフ主義者の流れが出てきていたし、産業革命の展開のさなかで1820年代には早くもリヨンの職工の暴動がおきたりもしていた。このような状況に直面して、コントは近代の階級が正当性をもつことを、近代社会科学の弁証の仕方を刷新してともかく早く仕上げねばならなかった。『実証哲学講義』（1939年）の「社会静学」は、こうした切迫した課題に対するまとまった回答であった。

コントの仕事は、サンシモン派やその他の創生期の社会主義者たちの階級批判への牽制でもあった。近代的階級は支配と搾取の関係である、とされた。しかし、コントから見るとこれは間違っている。機能主義の眼鏡で見ると、階級は社会的機能の異なる、互いに相手を必要とするパートナー間の連帯と協力の関係である。それは自発的に発生してくるころの上下の忠誠関係でもある。そしてそうであるからこそ、近代的階級関係は、永続的な関係でなくてはならない。

「企業者entrepreneurは、つねに少数であり、金銭と信用を含むさまざまな資材を所有し、すべての作業opérateurを指揮し、そのことから、すべ

ての結果について主な責任を負う。作業者は定期的賃金によって生活する大部分の労働者からなり、自己の究極的な寄与にはとくに関心ももたないまま、一種の抽象的な志向に従って、それぞれ要素的作業を実行する。』<sup>14)</sup>

「作業者だけが直接に自然と取り組むのであり、企業者の相手は主として社会である。こうした根本的差異の結果、産業生活がほんらい持っていると思われる、実証的精神を知らず知らずのうちに発達させられる思索上の効果は、普通、企業者においてよりも作業者において、より多く認められる。なぜならば、彼らの作業のほうが性格は単純であり、目的ははっきり定まっています、結果は直接的で、条件は厳しいからである。』<sup>15)</sup>

ここに見るようにコントの機能概念は、まさしく両階級の固有のはたすべき働きに応じて規定されている。

「必然的に永続する差異とは、日常の業務のそれぞれの性質によって、各種の社会的機能が二種類の知性に与える知的影響による差異である。』<sup>16)</sup>

ひとたび近代的階級が機能的な協働関係であり、同時に上下間関係であることが立証された上は、コントの教育上の仕事も位置づけもまた明確になる。それは社会学の機能とも言える。

「実証派は、この広大な社会階層に正しく浸透することができれば、その普遍的教育に対するいっそうの容易な接近と、その哲学的革新にたいするいっそうの強い共感とを自然に得ることができよう。』<sup>17)</sup>

---

14) *ibid.*, IX, p. 86, 同訳, 216 ページ。

15) *ibid.*, p. 86, 同訳, 216 ページ。

16) *ibid.*, p. 86, 同訳, 215 ページ。

以上のように、「企業者」は個別企業において「作業者」にたいする指揮管理機能を遂行する。だから産業社会の全体を管理するのも「企業者」階級であり、「作業者」階級は、そのもとに従属する。「企業者」階級は、「作業者」階級に仕事の素材を与え、後者をして外的自然を支配させるわけである。

コントは、このように上位の一般機能を遂行する「企業者」が下位の個別機能の遂行にあたる「作業者」を支配することを、いわば超歴史化された永続的な関係であると主張した。しかし彼自身は、どこかにまだ不安を感じていた。そこで念のためにこういうことも付け足した。それは、作業者が日々の職業労働において、啓蒙思想や社会主義による知的影響をまざまざと想起する可能性が絶対にはないとは言えないことから来る恐怖のようなものである。このためには「作業者」はコントの実証的哲学の教育をうけるべきであった。この計画を熱心に進めたコントは、プロレタリアが実証的にものごとを考えるべきだが、同時に「賢明な無思慮」を抱くべきだと述べた。いわば知の中に無知を埋め込むかのように。

「この（実証哲学の教育の・・・竹内）計画は、普遍的秩序のためにも個人の幸福のためにも望ましいものであり、将来、実証的社会のこの両極端の要素（思索家階級とプロレタリア・・・竹内）の間にできあがるはずの一般的関係が体系化されれば、当然、非常に重要なものとなるであろう。そればかりでなく、この計画はすぐに、日々の労働に追われて、プロレタリアが思索的教育のためにほとんど時間を割けない点を埋め合わせることによって、生まれつつある両者の結合を本質的に促進することができる。確かに、例外的な過重労働の場合など、それが不断の障害となって、すべての知的発達を妨げるようになるようなこともあるが、普通はこの障害も、課せられた仕事

---

17) *ibid.*, p. 86, 同訳, 216 ページ。

と仕事の自然の合間には精神に完全な自由を取り戻させる、あの賢明な無思慮とでもいった性格によって償われるものである。』<sup>18)</sup>

プロレタリアは物事を真剣に考えるとき実証的におこなうべし。働きすぎの場合、仕事の合間の「賢明な無思慮」で償うべし。実証的教育と「賢明な無思慮」とを結合することが、思索家とプロレタリアを結合させるためのコントのプランであった。

ともあれ、階級社会は、コントの寄与によって初めて、永続の必要あるものとして立論されるに至った。これは盤石の土台というわけでは必ずしもないが、しかし社会学的階級が、まさしく機能主義的に再構成されてはじめて正当化されるにいたった。

「外界に対する人類の働きかけが自然発生的に始まって以来、数においてはまったく違うが必要性においては同等の、二つのはっきり区別される階級(classes)が、絶えず結合する(combinaison)が必要となった。』<sup>19)</sup>

つまり、近代的階級は、コントによれば人類の永久の、自然への働きかけにおける連帯であって、たえず自発的従属関係を再生するもの、とされるのである。

そしてこうした産業領域における上下関係を、さらに上位で管理するものは政府である。コントは、こうした産業社会内部の上下関係をさらに上に向かって延ばしていく場合には、政府の発生についてもこう述べる。

「人間の作業が次第に分割されていけば、それはどうしても基本的従属関係を増大させることとなり、これが社会ソシエテそのものの内部から政府が自然に現れる傾向に拍車をかけるのである。』<sup>20)</sup>

18) この点コントがいかに熱心にプロレタリア教育をおこなおうとしていたかわかる点である。 *ibid.*, IX, p. 87, 同訳, 216 ページ。

19) *ibid.*, p. 86, 同訳, 216 ページ。

20) *ibid.*, IV, p. 488, 同訳, 274 ページ。

「したがって、あらゆる社会は、このように一つの自発的政府を形成する基本的傾向を持っているのである。この必然的傾向は、人間一人ひとりの性質の中にある二種類の性向、支配commandementの性向と服従obéissanceの性向の体系と一致するものである。」<sup>21)</sup>

政府が個別企業の総体をさらにもう一段上位から支配することは、このように理論づけられていたのであった。

以上のような社会静学におけるコントの分業論の垂直的転回によって、彼は分業論を上下の機能的依存関係として立証した功績を自賛している。

「この原理（分業という根本的原理）は・・・現実の人間関係の体系に必然的に合致した健全なsaine社会的機能の分類の最初の合理的萌芽となろうとしている。」<sup>22)</sup>

機能論的階級論の意義を彼は十分確信していたのであった。

### 3. コントの理論史的位置

コントが、19世紀の前半に社会学をつくった理由は一体なんだったか。彼の学的な情熱はおよそ何に向けられたものであったか。なぜ、この目的は一個の新しい学問というかたちを取らざるをえなかったのか。

こういった問題設定は、コントの学問創造の目的、いわばその超学問的な目的を問うことになるほかはない。コントは、フランス革命の鬼子であった。彼の前には啓蒙思想という巨大な知的体系がたちはだかっていた。これがフランス革命を主導し、同時にその後の前後左右への政治の危機と動揺とを基礎づけている元凶であると彼には思われた。だから彼は啓蒙思想に大きな怖れと反発とを同時に感じていた。啓蒙思想から近代科学的な側面を残

---

21) *ibid.*, p. 493, 同訳, 277 ページ。

22) *ibid.*, p. 489, 同訳, 275 ページ。

し、小ブルジョア・イデオロギーの側面を除去したものがコントの実証主義である。

啓蒙思想は、放っておけば自動的に消えていくような流行品ではなかった。なぜならば、それはひとつの理性的な学問の体系であり、同時に国王以外の一切の人民を一本にまとめるだけの強力な思想原理であったからだ。この原理は、理性、人民主権、個人の自律、自己決定といった相互に関連しあう強力な価値基準を含んでいた。

だから、この思想原理は、そのまま放置しておけば必ず次世代に多大な影響を与え続け、必ず再生する恐れがあるものだったのである。現実には、ルソーの思想は18世紀末にはバブーフのような徹底した小ブルジョアの平等主義を呼び起こし、さらに19世紀初頭になると工場労働者の抵抗運動を引き起こし始めていた。それは様々な社会主義思想へとバトンタッチされつつあり、その先にマルクスの社会理論が歴史の舞台に登場しようとしていた<sup>23)</sup>。マルクスの理論は、人民主権、個人の自律、自己決定を、資本主義の達成物の上に再建するものである。この意味で、啓蒙にたいする第一の否定としての産業資本主義の、第二の否定なのであった。

この意味において、コントの超学問的目的は学問的には機能的階級論に集

---

23) 「すべての比較的大規模の、直接に社会的または共同的な労働は、多かれ少なかれ一つの指揮を必要とするのであって、この指揮が、個別的諸活動の調和を媒介するのであり、また、独立した諸器官の運動とは区別される全生産体の運動から生ずる一般的機能を遂行するのである。個々のヴァイオリン演奏者は、自分自身を指揮するのであるが、オーケストラは、指揮者を必要とする。この指揮、監督、媒介の機能は、資本に従属する労働が協業的となるやいなや、資本の機能となる。資本の特殊機能としては、指揮の機能は特殊の特徴を受け取る。」K. Marx, *Marx-Engels-Werke, Bd. 23 a*, Berlin : Dietz Verlag, S. 350. K・マルクス『資本論』第一巻11章協業, 434ページ。ここでマルクスは、指図すること／されることの間一般的機能と特殊資本主義的な機能の分析を行っている。一般的機能は階級的に編成されて、特殊な形態をとって現れるのである。この「現れ」をそのまま目に見えるものとして実証的に把握すれば、コントの理論世界となる。この場合、階級社会は超歴史化され、独自に編成された特殊機能は人間社会一般の機能として永久化されるのである。コントとマルクスには機能をめぐる異なる視座と理論がある。

約される。それは一方で啓蒙思想の一切の理念上の価値基準を破壊し、刷新することへと向けられていた。近代的理性を産業的理性に、個別的私的所有を資本主義的所有に、人間の個体的自律性を資本家への従属性へと全面的に置換するものであった。コントの「進歩と秩序」は平和裡に営まれるべき産業社会における労資協調によってこそ対自然征服への協力を実質化できると唱える。これを否定するものは、新しい産業文明に敵対するものとみなされねばならないのだ。

他方、返す刀で、コントは階級の機能上のパートナーシップを永久化することによって、一切の搾取理論や従属への批判につらなるプロレタリアートの理論を牽制する必要にも応えて行った。

コントは、これら前後の二つの論敵に敢然と立ち向かった。古典的市民社会論はコントから見ると「自由市場経済およびけたたましく自己利益のこしか考えない個人からなる社会」<sup>24)</sup>を賞賛する理論として位置づけられる。また、産業社会は搾取と不平等を本質とする敵対的な社会だと主張するアソシエーション論から起こりうる非難に対してコントは、人間が支配と従属の自発的服従関係の原理を免れ得ないと反論することをもって応酬した。いずれにせよコントにとって、新旧二つの論敵は人間が有機体的に行為する可能性を、言い換えると人間が他人思いにつくすことの麗しさともいえるべきものを理解していないように思われたのであった。

さて、コントはいったい何をなしとげたのであろうか。彼の考えたのは、こういうことである。一方で産業社会は、もはや古典的市民社会に帰ることはできない。しかし他方で産業社会は、アソシエーション社会への期待を断固無視するしかない。なぜなら、人間が支配服従欲をもっていることをアソシエーション社会は見ようとしないからである。

---

24) Mary Pickering, *Auguste Comte*, Vol. 1, Cambridge Univ. Press, 1993, p.116.

このように語るコントの社会学は、両者を否定することによって、見事に産業資本主義に照準をすえた、固有の正当化論を、最も洗練されたかたちで提出したものであった。21世紀のいまとなつてはコントを読む人はほとんど稀と言ってもよいかもしれない。しかし、それにもかかわらず彼の近代階級論は生きている。それは、啓蒙思想とマルクス社会理論という、新旧いずれの立場からも析出されてこざるをえない一切の超越的な価値理念——人民主権、自由、平等、自律、自己決定など——を、実証主義にことよせて、排除するからである。

階級とは、人類のある小部分が他の大部分を搾取する関係をさすものである。搾取するためには指図する者／される者の関係を構築しなくてはならない。しかし、コントの手にかかると、搾取のための指図する者／される者の関係は、単純に、互いに異なる社会的機能を遂行する協働関係に他ならないことにされてしまう。このことによって搾取が隠蔽されるばかりでなく、自己決定権の剥奪が無問題化され、指図する者／される者の間の非市民社会的含意が抹消されてしまうのである。

では、ここにどういう関係把握が残るのか。階級関係は、社会を対象にする仕事／自然を対象にする仕事、人を使う仕事／労働する仕事、難しい仕事／容易な仕事といった並列的な、機能的相互依存性の関係として把握される。ちょうどそれは、男性の外で働く機能と女性の内で働く機能が並列的な家族内協働であると把握されるのと酷似している。したがって夫婦の協力関係がそうであるように、資本と労働の関係もまた両者が共通の協働目的（自然の支配）のために互いに役に立とうとする麗しい関係だ、というふうに把握されてしまうことになる。こうなると搾取することにまつわる一切の資本の指揮命令機能は「役立つ」と同義なものへと還元されてしまうのである。

社会学史上、機能主義がいかなる目的をもって登場したか、以上の記述によって明確になったであろう。それは、古典的市民社会論（啓蒙思想）が正

当化し得ない近代的階級を機能的な協働関係として永久化させることを目的とするものであった<sup>25)</sup>。歴史的起源の刻印は後続の社会学者たちの仕事を根底で制約するものとなった。というのも社会学者たちは、一見するとコントを倉庫の奥へ放り込んで、各自が新基軸をもって、次々に、しかも華々しくデビューしてきたように見えたのであるが、実はそうではなかったからだ。次世代の社会学者たちは、実のところ、コントによって初めてなされた、産業社会の基礎構造の正当化を裏口から受け入れ、この基礎構造の外部に非階級的な現象として発現してくる様々な社会連帯、個人一般を苦しめる官僚制、国民すべてが信奉する価値的統合などを、それぞれまだコントの仕事が対象としえなかった事象とみなして、テーマ化していった。それらは、家族、都市、産業、職業団体、官僚制等々の、連辞符的な社会学的領域における社会統合の課題に個別的に立ち向かったのである。これらの個別的な問題性のうち近代的階級の存在と無関係なものはがんらい稀である。ところが、社会学者たちは、コントの仕事を前提にしているがゆえに、この階級関係をどうつつきまわしても、そこに機能主義的協働関係を見いだすばかりで、それらの機能が十分満たされるか、それとも不全であるかだけしか見ることができなかったのである。コントの論理構造に制約される以上、機能の充足それ自体が根源的問題（人間が別の人間によって支配されていること）をはらんでいることは視野の外におかれたわけである。したがって、第二世代の社

---

25) ここに興味深い論点がある。機能的協働によって階級を隠蔽する場合、実体概念を否定して登場したはずの機能概念がふたたび実体化するという傾向をはらんでくるという問題である。たとえば福沢諭吉の『学問のすゝめ』（1872年）が、身分制を否定するうえで能力主義的な「そのものの働きによる」という機能論を持ち込み、この機能論の見地から支配層の「働き」によって近代社会を永久化できるかのような議論をしたとき、ほんのわずかではあるが再実体化の傾向は露頭をみせていた。のちに丸山眞男が「であることとすること」で、パーソンズ社会学の帰属主義と業績主義の区別にはほぼ対応するような形で問題をわかりやすくパラフレーズしたときにも、おそらく同様の再実体化の問題が、もっと深刻な形で登場しつつあったようにみえる。機能主義の理論における機能の再実体化の問題については別稿で検討してみたい。

会学者たちが発見していった社会学的な統合課題は一切が超階級的または無階級的な現象としてしか見えないわけである。本稿の立場からは、コントによる存在拘束性という事実が非常に重みをもつことになる。つまり、コントを土台に据えると学説史的な因果関係が際立って見えるようになるわけである。すなわち、コントとそれ以降の社会学者たちの仕事を総体として並べてみると、階級に根源を持つ問題の一切が超階級的または無階級的な現象形態をとって現前するという法則が立てられるようになるから、まさしく社会学者たちはこの「法則」に即してそれらを現象論的に扱うことになったわけである。アカデミックな社会学というものの理路構造がおよそここで論じたようなかたちで歴史的に仕上がってきたものである以上、これは如何とも避けがたいことであった。

こうして社会学史は一つの物語的構造をもつことになる。ちょうどそれはF・カフカの『城』を思わせる。社会学者たちは社会学史の内部では、皆自分の頭上にみえる城の本丸に接近しようと試みるのであるが、いくらもがいてもそこへの道を見出せない。こうしたもどかしさのなかで、社会学者たちは城下の路地で押し合いへしあいを続けることになったのである。

## The Historical Origin of Functionalism: Knowledge, Industrial Society, and Entrepreneur/Operator

Masumi TAKEUCHI

Functionalism, a main stream of sociological theory from its birth, faced transitions following its inception in the 19<sup>th</sup> century to the present time. The historical origin of sociological functionalism can be found in the work of Auguste Comte (1798–1857). How did Comte contribute to the formation of functionalism? This paper qualitatively analyzes Comte’s theoretical work in two stages of modernization from simple civil society to industrial capitalism. The modern class is the cooperative relation between entrepreneur and operator, according to Comte’s view. Comte used the word “entrepreneur” instead of capitalist, as well as “operator” instead of worker. Thereby, capitalist class domination and exploitation of workers were reduced to spontaneous subordination of operators to entrepreneurs. In addition, Comte rejected the ideal of self-government, the social contract, and autonomy arguing for the spontaneous subordination in modern corporations. He pointed to the subordination deriving particular divisions of labor from general divisions of labor. Thus, the general controls the particular. In this way, he argued that a modern class hierarchy emerged after the French and Industrial Revolutions. This is the very point that I emphasize. By Comte’s theoretical construction, the function of exploitation was as mere task of modern organization. As a result, throughout the development of functionalist theory many scholars unconsciously depended on Comte’s work. Yet, the performance of functionalism is not sufficient to explain modern society. The following generations of sociologists should discover new theoretical solutions to understand social disintegration outside of

modern corporations. Nevertheless, Comte contributed greatly to the formation of main stream sociology.

Keywords: functionalism, theory, Auguste Comte, class, division of labor